

# 思考整理に関するフレームワークの構築

A Framework for Structuring Thought

木村 ちよ<sup>1)</sup> 蘆澤 雄亮<sup>2)</sup>

Chiyo Kimura<sup>1)</sup> Yusuke Ashizawa<sup>2)</sup>

1) 芝浦工業大学大学院 2) 芝浦工業大学

**Abstract:** This study conceptualizes “goal diffusion,” a state in which attention shifts from an original purpose to subordinate goals, methods, or indicators, leading to a gradual loss of alignment with the initial purpose. Through reflective analysis and tool development, the study reveals that such diffusion can

occur even within research processes themselves. Moreover, it suggests that individuals in this state often struggle to recognize it, even when external feedback is provided. Based on these findings, the study highlights the necessity of tools that enable self-recognition of goal diffusion.

**Key Word:** goal diffusion, goal displacement, research methodology

## 1. 背景および目的

一般に、行為にはその方向や意義を与える「目的 (purpose)」と、そこから導かれる具体的な「到達目標 (goal)」が存在する。ただし、これらは必ずしも厳密に区別されておらず、goal 概念は desire や intention と近接しつつ論じられている [1]。一方、実際の社会的実践や研究活動においては、purpose に照らして goal や手段が適切に選択されない場面も少なくない。例えば、Merton [2] は、官僚制において規則や手続きといった本来は手段であるものが自己目的化し、元来の目標が後景化する現象を論じている。これは一般に「手段の目的化」と呼ばれる現象に相当する。近年、Huizinga [3] は、このような目標転換 (goal displacement) を、当初の目標は形式上保持されつつも、実際には別の目標が追求される状態として整理し、そのパターンとして、目標の狭窄 (goal narrowing)、入力への目標転移 (goal diversion to input)、処理過程への目標転移 (goal diversion to throughput) などを示している。すなわち、目的を見失う状態とは、単に目的から逸脱することではなく、手段や指標、あるいは下位目標が前景化することで、本来の purpose との関係確認が希薄化していく過程として理解できる。

この問題は研究活動においても生じうる。たとえば、「かわいい」という語に人々が抱くイメージを明らかにすることを目的としてヒアリングを行う場合、得られる回答は厳密な意味での確定的データというよりも、仮説構築の手がかりとして位置づけるのが妥当である。しかし研究の過程では、「曖昧な語に対する回答の正確性を高めること」それ自体に関心が集中することがある。このとき問題となるのは、その行為が直ちに当初の目的から逸脱しているか否かではなく、「その手段は目的に対して適切か」という確認行為そのものが失われる点にある。Chamberlain [4] は、方法論的関心が研究対象や研究目的に優先する状態を methodolatriy と呼び、Poulis and Kastanakis [5] は、方法や理論への過度な執着が研究の進展を妨げうると論じている。これらの指摘は、研究においても目的の確認が散逸しうることを示している。

以上を踏まえ、本研究ではこのような状態を「目的の散逸」と捉える。ここでいう目的の散逸とは、目的そのものが消失することではなく、手段、指標、方法、あるいは下位目標への関心が前景化することで、本来の目的に照らしてそれらの適切性を確認す

る営みが徐々に失われていく状態を指す。本研究では、研究活動において自らがこの状態にあることを自認できるツールの開発を目的とする。

## 2. 研究の実施内容と考察

本研究では、上記の目的を達成するために、概念整理 (図1)、自身の思考過程の図示 (図2) や観察 (図3) による内省、論理の逸脱に関するアンケート調査 (図4)、観測事実を正確に記述するツールの考案 (図5)、ならびに日常語における語の省略による意味の曖昧性を防止するツールの考案 (図6) を実施した。しかし、これらの実施内容から明らかのように、研究の過程において、当初の目的であった「目的の散逸の防止」から、「論理の飛躍や逸脱の防止」へと関心の中心が移行していたことが確認された。これは、Huizinga [3] のいう goal narrowing が生じていたことを示すものと考えられる。

もともと、論理の飛躍や逸脱の防止は、目的を見失う状態を誘発する要因の一つであり、その因子に着目すること自体は不自然ではない。しかし、その厳密性への過度な着目は、当初の目的、すなわち目的の散逸を防止することに対して、必ずしも十分に寄与するものではなかった。この点については研究過程において他の研究者から指摘を受けていたが、筆頭著者は当時その意味を十分に理解できず、結果として研究の方向修正に至らなかった。

この過程を通じて得られた一つの知見は、「目的の散逸」が生じている当事者は、たとえ外部から指摘を受けたとしても、その状態を自認することが困難な場合がある、という点である。

## 3. 今後の予定

本研究では、結果として Huizinga [3] の指摘する goal narrowing そのものの状態に陥ったため、当初想定していた手段の構築や新たな知見の十分な構築には至らなかった。しかしその一方で、目的の散逸状態にある当事者は、たとえ他者から指摘されたとしても、それを自認することが難しい場合があるという点は重要な知見として得られた。すなわち、必要とされるのは単なる外部からの指摘ではなく、当事者が否応なく自らその状態を認識できるようなツールである。今後は、この知見を踏まえ、目的の散逸を自認可能にする支援ツールの具体化に向けて研究を継続する予定である。

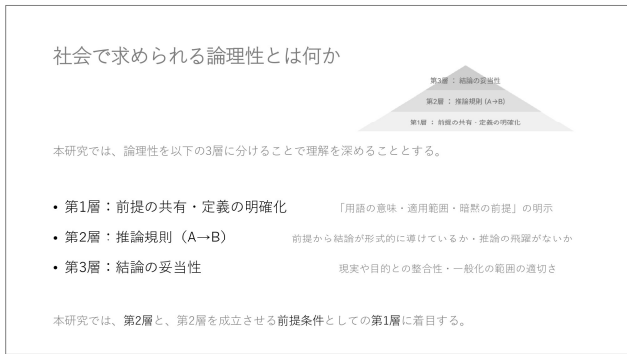


図1 概念整理

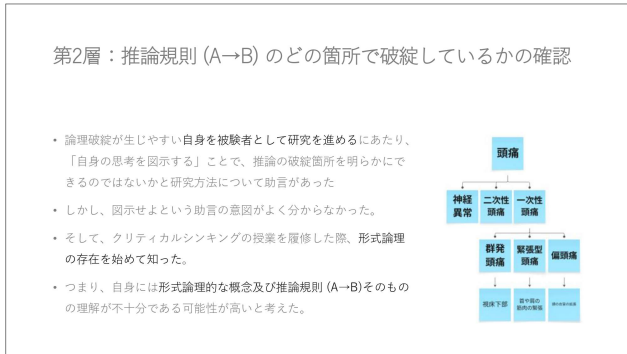


図2 思考過程の図示

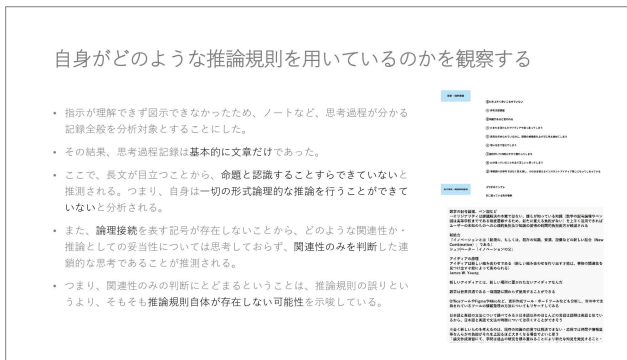


図3 思考過程の内省

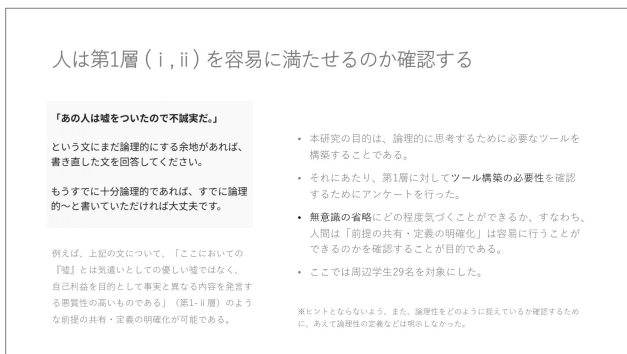


図4 アンケート調査



図5 観測事実を正確に記述するツール案

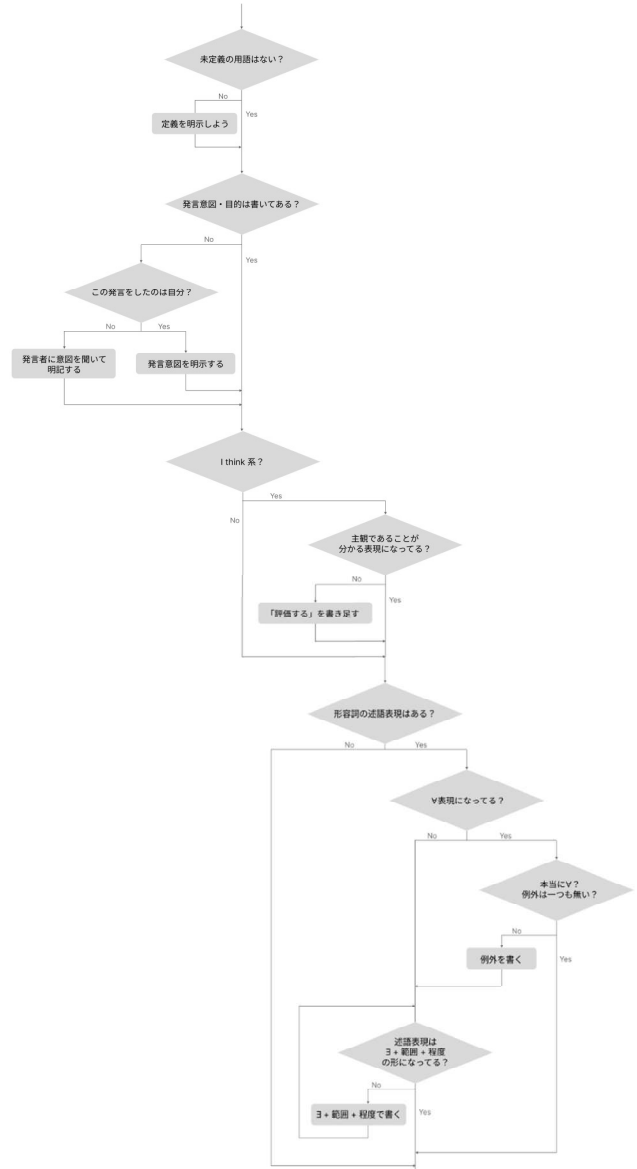


図6 語の省略による意味の曖昧性を防止するツール

参考文献

- Governatori, G., Olivieri, F., Scannapieco, S., Rotolo, A., and Cristani, M., "The Rationale behind the Concept of Goal," Theory and Practice of Logic Programming, Vol. 16, No. 3, 2016, pp. 296-322.
- Merton, R. K., "Bureaucratic Structure and Personality," Social Forces, Vol. 18, No. 4, 1940, pp. 560-568.
- Huizinga, K., "Indications of Goal Displacement in Regulatory Enforcement Agencies: An Empirical Exploration," Administration & Society, Vol. 54, No. 8, 2021, pp. 1510-1537.
- Chamberlain, K., "Methodolatry and Qualitative Health Research," Journal of Health Psychology, Vol. 5, No. 3, 2000, pp. 285-296.
- Poulis, K. and Kastanakis, M., "On Theorizing and Methodological Fetishism," European Management Journal, Vol. 38, No. 5, 2020, pp. 676-683.